

ハウステンボスにみる池田武邦の作法

超高層から 茅葺きへ

井川
聡

海鳥社

超高層から茅葺きへ◎目次

自然回復の先駆け

10

よみがえる大村湾 12

琵琶ノ首鼻 14

矢矧との再会 17

盟友・神近義邦 22

新宿三井ビル五十階で 27

長崎バイオパーク誕生 29

風車のアイデア 31

オランダ村計画の始動 35

伝統にこだわる 38

神近、捨て身の方策 43

海からの視点 46

プリンス・ウィレム号 50

交渉のテーブル 55

東のデイズニールランド、西のオランダ村 59

千載一遇のチャンス 65

針尾工業団地 68

思想は江戸 73

エコノミーかエコロジーか

79

雨のオープニング 80

妥協せず 83

優しさの経営 86

一八〇度の方針転換 89

時間との戦い 92

環境への取り組みに対する評価 95

官房長官会見に発奮 97

環境会計では「黒字」 100

「Xデー」迫る 103

二・二六前夜 106

運命の朝 109

| | |
|------------|-----|
| 記者発表の場で | 113 |
| 不思議な現象 | 117 |
| ハヤブサが帰ってきた | 119 |
| 会社減んで | 122 |

超高層建築への道……………125

| | |
|-----------|-----|
| 大村湾から始めよう | 126 |
| 原風景 | 132 |
| 水へのこだわり | 137 |
| 天罰が下る前に | 140 |
| 湘南中学 | 143 |
| 東大進学 | 146 |
| 混沌の中から | 150 |
| 栄養失調で倒れる | 152 |
| 超高層への挑戦 | 154 |
| 畳がヒントに | 156 |

| | |
|---------|-----|
| 日本設計創立 | 161 |
| 矢矧が支えに | 162 |
| 九九%の反対 | 165 |
| 一八〇度の転換 | 168 |

日本の風景を守る戦い……………173

| | |
|---------|-----|
| 琵琶湖を守れ | 174 |
| 覚悟のうえで | 180 |
| 軈との出会い | 185 |
| 緊急提言の波紋 | 189 |
| 画期的判決 | 193 |
| 鵜養の池田塾 | 196 |
| 作法と不作法 | 198 |
| 理想郷の資質 | 205 |
| 模範都市の悲劇 | 207 |
| 作法の伝承 | 211 |

- 超高層から茅葺きへ 216
- 縁によって結ばれる 221
- 神々を忘れた暮らし 224
- 三十世紀の古都 228
- 火の玉の意志 231
- 男たちの祝宴 237
- 意気に感ず・中山素平 241
- 盟友C・W・ニコル 243
- 長崎オランダ村、その後…… 248
- デイズニールランドを否定する 251
- 文明VS文化 256
- 科学技術が凶器と化す 258
- 共同体の崩壊 260
- 海に聞け 263

ハウステンボスの品格 266

新時代への道標 269

池田武邦関連略年表 273

参考・引用文献 280

なぜ、いまハウステンボスなのかあとがきにかえて 281

自然回復の先駆け



よみがえる大村湾

それは、世代も違えば、住んでいる世界もまったく違う、二人の男の出会いから始まった。

一九七二（昭和四十七）年。池田武邦、四十八歳。神近義邦、二十九歳。

日本は高度経済成長の頂点に達しようとしていた。

この年の二月、札幌では冬季五輪が開催され、スケートのジャネット・リンやジャンプの笠谷幸生らの活躍が話題となった。グアム島残留の元日本兵横井庄一が「恥ずかしながら」の帰国を果たしたのは二月二日。

横井が、独りジャングルで歳月を過ごす間、一九六七年に日本設計事務所（現日本設計）を創立した池田は建築家の道をひた走っていた。

その年の春、東京、日本設計の入社試験。面接をしていた池田の前に、ひとりの女性が現れた。紹介状と履歴に目を通す。「長崎県出身」とある。不意に懐かしさがこみ上げた。

「長崎か。大村湾はいいところだよな」

思わずそんな言葉が口をついて出た。

女性はびっくりした様子で、「はい」と答えた。女性の笑顔が、穏やかな大村湾の風景と重なった。池田は、心の窓に春の陽を容れたように気持ちが暖かくなるのを感じた。戦後、一度も思い出

すことのなかった景色が突如として脳裏に浮かんできた。

二十七年前の一九四五年四月六日。戦艦「大和」以下、連合艦隊の残存部隊は「一億総特攻のさきがけ」として、沖繩を目指して出撃した。池田はその一員として、軽巡洋艦「矢矧」に乗艦していた。

四月七日午後二時五分、矢矧は米軍機の雷爆撃により撃沈。その十八分後、大和も沈んだ。顔面に大やけどを負った池田は、冷たい海に投げ出された。五時間の漂流後、駆逐艦に救出されて九死に一生を得、佐世保に帰ってきた。

佐世保の海軍病院に入院。やがて傷はいえたが、もはや、帝国海軍に池田の乗る艦船はなかった。池田は、針尾島の方へ、ぶらりと散歩に出た。大村湾と山の緑がまぶしかった。山桜が咲いていた。

「国破れて山河あり、か」

つぶやくように言った。

「それにしても、なんて美しい景色なんだ。もし平和な時代が来たら、こんなところに住みたいな」と、夢のようなことを考えた。ほんの一瞬の記憶だった。それが、入社試験の面接で突然よみがえったのだ。

「不思議としか言いようがない。神様がそうさせたと思っている。この瞬間がなければ、ハウステンボスもこの世に存在しないのだから」

琵琶ノ首鼻

面接の日から一週間ほど後、大村湾沿岸に早くも池田の姿が見られる。池田は弦を離れた矢のように東京から長崎県西彼町（現西海市西彼町）へと飛んでいたのである。

「昔を思い出して大村湾が無性に懐かしくなり、あの美しい海を見に行きたくなった」と、池田は振り返る。

女性の付き添いで来ていた叔父は、すぐに小学校の先生をしている友人に連絡を取った。先生は、以前下宿していた西彼町の名物食堂「菊水」の主人に相談した。

「東京の池田さんという方が、思い出深い大村湾で休暇を過ごせる所を探しておられるそうです。どなたか役に立つ人はいませんか」

「それなら、打ってつけの男がいるよ」。主人は膝を打った。

彼が紹介したのが、神近義邦だった。当時、神近は長崎バイパークの前身のグリーンメイクという会社を経営していた。地元の青年たちの親分的存在で、町長選を仕切って支援する候補を当選させるなど、すでに地元の「顔」だった。

池田が神近宅を訪ねたのは日曜日。神近はテレビを見ていた。

「ごめんください」

「はい、どなた」

廊下を踏み鳴らして神近が玄関に出てきた。

「お休みのところ、突然、ごめんなさい。知人に紹介されてうかがいました」。そういつて名刺を差し出す池田。「（株）日本設計事務所 副社長 池田武邦」とある。

（なーんだ、設計屋のおじさんか。でもいったい何の用があるのだろう。）神近は、名刺と池田の顔を見比べ、不審そうな表情を浮かべた。

池田が用件を伝える。神近はどうも腑に落ちない。

「どうして私があなたの土地探しに協力しないといけないのでしょうか」

「その通りですね」。池田は相槌を打ち、丁寧言葉をつないだ。

「実は、大村湾は私にとつて戦友との思い出の地なのです。戦争中、僕は一〇〇%生きて還ることはないと思っていた特攻作戦で、たまたま助けられた。その時に見た大村湾の美しさが忘れられないのです。ぜいたくで土地を買いたいわけではありません。ただ、この思い出の地で、ひととき過ごせる場所がほしいのです」

神近の不審は、春風に逢った池の氷のように溶けていった。

神近は一瞬目を閉じ、深く頷いてから再び目を開いた。

「分かりました」

神近は、双頬に微笑を刻んで言った。いったん決断すれば、行動は速い。



大村湾の小さな岬・琵琶ノ首鼻

「さ、車に乗ってください」

神近は池田をマイカーに押し込むと、自ら運転して町内の景勝地を二日間かけてくまなく案内して回った。「どこでも気に入った所を言ってくださいよ。段取りは全部、私がつけますから」

池田が魅せられたのは、大村湾内の小さな入り江を抱き込むような形をした小さな岬だった。琵琶のような形をしているので、琵琶ノ首鼻という名前がついていた。

「ここがいい。神近さん、ここに決めました」

池田は岬の先端に立ち、波静かな大村湾を飽きずに見つめていた。西彼町風早郷字琵琶ノ首鼻。池田が庵を結んで、妻久子と静かに暮らすことになる場所である。武邦と久子の名前を一字ずつ取り、「邦久庵」。

池田は戦死した海軍兵学校時代のクラスメイト全員の命日を手帳に記している。庵で暮らし始めた池田は、その日に合わせて、海に向かって鎮魂の祈りを捧げる

日々を送ることになる。

が、それはまだ先の話である。

矢矧との再会

さて、話は邦久庵ができる前の一九六七（昭和四十二）年である。

神近は早速、地主に話をつけ、町の青年たちを動員して、池田が夏休み、冬休みを過ごすためのプレハブ小屋を岬の突端に置いた。この「小屋」、もとは、池田の大学時代の後輩が開発した「スペースカプセル」という名のアルミ製のプレハブ型別荘だった。展示品として使われたものが不要となり、それを池田が譲り受けた。

問題は、そのカプセルを岬の突端まで、どうやって運ぶかだった。当時の琵琶ノ首鼻は自然のまま、道などない。海から船で運搬する方法も考えたが、遠浅で難しい。池田は、どうしようかと悩みながら帰京したが、いったん引き受けたらやり通す神近の行動力は止まらなかつた。

神近の号令一下、トラックから下り立った若者たちは、かけ声も軽やかに細い山道を広げ、海岸沿いに新しい道を建設した。海岸線に出張って邪魔になる岩は、干潮を見計らって、重機でガリガリと削った。こうして陸側から搬入された「小屋」はクレーンでつるされて、めでたく目標地点に設置された。

次の休みに訪れた時、池田はあぜんとした。

「あらら……。あの自然のままの状態がよかったんだけどなあ」

ひとりごちたが、後の祭りである。ともかく、小さな住処はできた。

「さあ、これで引越しもすんだわけだし、ちょっと近所へあいさつ回りに行って来るよ」と池田。

神近はさりげなく言った。

「あ、それでしたら、漁協の組合長の家に、お酒を持って行かれた方がいいですよ」

思わぬ事態が発生していた。神近が削り取った海岸の岩は、地元漁民が漁網をかけるための大切な岩だったのだ。

「だれだ。断りもなく勝手な振る舞いをする輩は」と、漁協はカンカンだった。このトラブルを、神近は池田に報告していない。

何も知らない池田は暢気なものだ。

「地元の有力者なのだろうから、あいさつしておくのは当然だろうな」くらいの気持ちで、一升瓶をぶら下げて、ぶらり、ぶらりと組合長宅へ。組合長宅は岬の付け根のところにある。

神近は、池田の背中を見つめながら、「こつてり油を搾られるだろうな」と心配するのだった。

「こんにちは」。組合長宅の玄関は空いていた。

「おじゃましまーす」。中に向かって声をかけると、「はい」と、遠いところから返事がかえっ

てくる。

ふと、玄関の鴨居の上に目が止まった。額に入った写真が麗々しく掲げてある。

「こ、これは、矢矧じゃないか」

それは紛れもなく、戦時中、池田が乗艦していた軽巡洋艦「矢矧」の雄姿だった。

池田は、海軍兵学校を卒業し、練習航海を終えてすぐに矢矧乗艦を命じられた。一九四三（昭和十八）年十二月の竣工から四五年四月の沈没までの間、航海士、発令所長、測的長と配置は代わったが、ずっと矢矧で過ごした。

今、目の前にある写真は、竣工直後、できたてホヤホヤの時に周防灘で行われた「公試運転」で撮影されたものに違いなかった。池田はこの写真を引き伸ばし、靖国神社で慰霊祭を行った際に遺族や元乗組員に配ったことがあった。この写真もその時に配布した中の一枚と思われた。

写真に気を取られている池田の前に、組合長が姿を見せた。

組合長は、池田の顔をのぞき込んで叫んだ。

「航海士っ、池田航海士ではありませんかっ」

はっとして目を見張る池田。

「航海士っ、覚えておられますか。看護兵曹の浅田です」

浅田善一は早くも目を潤ませている。

「お懐かしい。航海士、よくぞご無事でいらっしやいました」



岩国航空隊派遣教育で航空服姿の池田さん。珍しい一コマ

浅田はもう戦時中の部下の顔に戻っている。

「さ、さ、どうぞ。むさ苦しいところですが、お上がりください」

池田にもようやく記憶がよみがえってきた。浅田善一は、医務班担当として矢矧に乗り組み、負傷者の手当などに当たっていた。池田も指先を切った時、ヨードチンキを塗ってもらった覚えがある。

「ああ、そうだ、あの浅田さんだね。いやあ、よくご無事で」

池田は、「こんな偶然があるのだろうか、英霊が呼び寄せたのだろうか」と思った。

酒を酌み交わしながら、浅田は、レイテ沖海戦で足を負傷し、シンガポールの海軍病院に入院するため矢矧を下りたことを話した。池田は、レイテの後の沖縄海上特攻で五時間の漂流の後、駆逐艦に救助され、奇跡的に生き残ったことを語った。

「戦闘中は、士官室が応急処置室になった。浅田さんはそこに詰めていた。レイテ沖海戦では、米駆逐艦の砲弾がこの部屋を直撃し、大勢の戦死者を出した。浅田さんもその時に負傷したので

す」

昔話に花が咲く。二人は時を忘れた。

浅田は今だから言える、こんな話もした。池田と同期の甲板士官が看護室を巡検する際、指で埃をチェックして、やかましく説教をするので、指で触れそうなところに、わざとアンブルを細かく割って置いておく「仕返し」をやった、と。

地元の有力者とあつという間に昵懇（じふこん）になり、池田はこの土地がますます好きになった。

集落の人はほとんどが浅田の親類か知り合いで、皆、「池田先生、池田先生」と親切にしてくれた。生きたナマコや取れたての野菜を届けてくれる人もいた。

「え、岩を壊された話？ そんなもの全然、ひとつ言も出なかったよ」

意気揚々と小屋に戻ってきた池田。

神近は怪訝な顔をしている。内心は、二時間たっても三時間たっても帰ってこない池田の身を案じていた。しかし、何も聞かない。

「大物ですよ、神近さんは。けろっとしているんだから」

戦後、人々がそれまでの伝統的な価値観（く）を弊履のごとく捨て去ったのを体験して以来、池田は「世間の尺度」というものを全く信用していなかった。自分が直接見たものしか信じないが、いったん信じたら、とことん付き合う。

神近にも、そういうところがあった。

神近は言う。

「人と人との出会いは不思議です。初対面の、出会った瞬間に心と心が触れ合い、五分、十分話すうちに、すっかり意気投合してしまう。理屈じゃない、心で感じるのです」

二人には、世代を越え、男同士、相通じるものがあつたようだ。以後、池田は年に三、四回、休暇のたびに「小屋」を訪れるようになる。神近が国鉄早岐駅や大村空港まで出迎えた。毎晩のように、神近とその仲間たちが集まって宴会が催され、囲碁、麻雀、腕相撲などに興じた。酒も、勝負事も、神近にかなうものはいなかった。

「東京では、コンピュータと格闘する毎日だったので、神近さんや地元の人たちとふれ合い、素晴らしいエネルギーをもらいました。神近さんは私心のない、人生意気に感じてまっしぐらに動く人。だから、いつも周りにたくさんの人が集まっていました」と池田は振り返る。

ひょんなことから大村湾との再会を果たした池田。そこでの神近との出会い。この後、二人で手を携えて、途方もない巨大プロジェクトに突き進んで行こうとは夢にも思っていなかった。

盟友・神近義邦

ハウステンボスは、神近義邦が起案し、池田武邦が設計した。ロマンチスト神近の夢にリアリスト池田が輪郭をつけ、さらに神近の実行力がそれを形にしたといえるだろう。

神近は言う。

「ハウステンボスが成功したかどうかなんて、千年後にしか分かりませんよ」

なんとというスケールの大きさだろう。

池田と出会うまでの神近について紹介しておこう。

神近は太平洋戦争開戦の翌年、一九四二（昭和十七）年八月二十一日、長崎県西彼町に生まれた。勝海舟義邦の名をもらい、義邦と名付けられた。中学卒業後、家計を考えて就職しようと考えていたが、母が進学を強く勧め、働きながら学べる西彼農業高校定時制に通った。卒業後、西彼町役場に就職。傍ら、土地を借りて花の栽培に精を出した。朝早く起きて、出勤前に手入れをし、夕方

日が暮れるまで畑で過ごした。

「役場勤めと農業の二束のわらじをはいて、一日も休まず夜遅くまで働きました」と、神近は回顧する。

一九六五年、長崎は大旱魃に襲われた。神近は当時、十四万本の菊を栽培しており、毎晩、池に水をくみに行っては、懐中電灯を口くわえて菊に与えた。他の畑が大損害を受ける中、神近の菊はすくすく育ち、飛ぶように売れた。



神近義邦さん

なぜ、いまハウステンボスなのか あとがきにかえて

ハウステンボスを知らない日本人はいないだろう。しかし、その理念や誕生の経緯はあまり知られていない。

一九九二年三月、日本列島の西の果てに忽然と現れた「街」の威容に、筆者は目を見張った。「これは何なのだ！ 誰が、何のために、こんなものを創ったのか」と思った。

謎が解けたのは十年後だった。

二〇〇二年九月、筆者は読売新聞佐世保支局に着任し、ごあいさつにと、神近義邦さんの事務所を訪ねた。当時、ハウステンボス株式会社は経営危機に陥っており、神近さんは社長を引責辞任し、経営から身を引いていた。ふつうなら、失意の底にあつて新聞記者などとは会いたくもないはずだが、神近さんは従容とされていた。

「ハウステンボスはね、テーマパークではないんですよ」

熱心に説明される神近さんの顔を見、声を聞くうち、筆者はすべてを了解した。頭で理解したのではなく、肌で感じ取ったといった方がいい。

古里に地中海のリゾート地に負けないような楽園をつくる――。神近さんはその夢を実現するため、命を燃やし、火の玉となって働いたのだった。行動力の源には曇りのない真心があり、その人

格力が、それまで縁もゆかりもなかった様々な分野の人々を吸い寄せ、手品のような鮮やかさで荒廃した工業団地を緑豊かな街に変えた。

参画した人たちの側から見れば、神近さんの夢に、それぞれの夢を重ねたという面もある。ハウステンボスは、こうした人々の魂の共振によって生まれた、熱狂の産物といってよいだろう。

神近さんが磁場の中心にいる間、ハウステンボスには、勢いがあった。夢があり、ロマンがあった。ところが、神近さんが社を去り、磁力が失われると、人材は雲散霧消し、経営は支離滅裂となった。

そこに、ひとり踏みとどまったのが、池田武邦さんだった。

邦久庵に池田さんを訪ねたのは、二〇〇二年暮れのこと。池田さんはマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄海上特攻を戦いぬいた元海軍士官だった。戦後、建築家に転じ、超高層建築のパイオニアとなり、お会いした当時は、神近さんからバトンを引き継ぐ形でハウステンボスの代表取締役会長を務めていた。

「建築家として日本のために役に立つことを必死にやってきた。でも、戦争の体験に比べたら、別にたいしたことはない」

池田さんは淡然としたものだった。その戦争体験については、拙著「軍艦『矢矧』海戦記―建築家・池田武邦の太平洋戦争」(二〇一〇年、光人社刊)に詳しく書いた。本書はその続編といえる。併せてお読みいただけると幸いである。

とまれ、赫々たる戦歴・経歴の池田さんが、茅葺きの家に住んでいるのも驚きだったが、囲炉裏に薪をくべながらの述懐は、さらに衝撃的だった。

「僕がやってきたことは目先の合理主義だった。人工的な環境の下では、人間は決して安らぎを得ることはできない。体は楽でも精神がおかしくなる。このまま環境破壊を続けていると、天罰が下るだろう」

これは、たんなる池田さんの自省の弁ではない。己の欲望を満たすため美しい日本列島の自然を破壊し続けている私たちへの警告である。筆者はそう受けとめた。

設計者である池田さんの半生を追うことで、ハウステンボスの思想と成り立ちが鮮明になり、「ハウステンボスとは何か」という問いにも明快に答えることができたのではないかと思っている。執筆中に三・一一東日本大震災、福島原発事故が起きた。池田さんの警句は、ますます重みを増している。震災後、近代合理主義、物質主義といった価値観に終止符を打つべきだという声も聞かれるようになった。今こそ、ハウステンボスがテーマパークの枠を超えた新世紀の都市づくりの実験場であり、日本人が失った自然に対する「畏敬」を取り戻す試みであったことを思い起こしてほしい。

唐の都・長安をモデルにした京都が、何度も焼け野原になりながら、押しもおされもせぬ日本を代表する都市になったように、千年後のハウステンボスが日本を代表する街になる可能性は十分にあると思う。ハウステンボスの手法を応用すれば、いろいろなことができる。例えば、コンクリート

護岸を自然の渚に造り替え、都市の暗渠をせせらぎに変えれば、生態系がよみがえり、美しい国土が復元されるだろう。高速道の代わりに、国をあげて自転車道や遊歩道を整備すれば、限界集落が宿場町に生まれ変わるかもしれない。こうした試みによって、雇用が生まれ、余暇の楽しみが増えれば言うことはない。本書が、震災復興、沖縄の米軍基地返還に伴う広大な跡地利用など、まちづくりを考えるうえでのヒントになれば幸甚である。

二〇一二年一月十一日夜、「池田武邦さんの米寿を祝う会 神近義邦さんの快気を祝う会（神近さんは大腸がんを患い、五年間で五回の手術をされ、奇跡的な回復をされた）」が、両ご夫妻をお招きして盛大に開催された。会場はフレンチの巨匠・上柿元勝さんが特別顧問を務めるハウステンボスジェイアール全日空ホテル。「お二人のお祝いであれば、私が厨房に入ります」と、ムツシュ自ら料理に腕をふるわれた。

あいさつに立った池田さんは、「特攻で一度死んだ身ですが、神近さんをはじめ、皆様のおかげで長く、楽しい余生になりました」とお礼を述べられた。神近さんは四十年間の池田さんとの偶然の出会いから今日に至る思い出を、エピソードを交えて語り、「池田先生はエコロジーの師匠」とたたえた。

参加者約五十人の中には、長崎オランダ村の立ち上げからハウステンボス法的整理の日まで、神近さん、池田さんを支え、共に苦難の道乗り越えてきた元役員たちの姿があった。中川一樹さん（ザ・グローバルズ社長）、磯本裕幸さん（長崎リハビリテーション病院理事・事務長）、金原雅樹

さん（長崎県立美術館副館長）、そして筆頭株主でもあった宅島建設の宅島寿雄さん（長崎県商工連合会会長）……。今はそれぞれ別の道を歩んでおられるが、離れていても気持ちは一つ、同志であることに変わりはないようだった。再会を喜び、思い出を語り合う和やかな宴席で、金原さんは「今の世代から次の世代へ、駅伝のたすきをつないでいくように、だれかが（ハウステンボスの）街を守っていつてくれたらいい」と話された。筆者もそう願わずにはおれなかった。

ハウステンボス同様、本書もまた、魂と魂の共振の産物である。池田さんを建築界の最前線から佐世保に引き寄せた神近さんの磁力が、時空を超えて筆者をも吸い寄せたのに違いないと思っている。改めて、池田さん、神近さんに、心からの謝意を表したい。

長年執筆を励ましてくださった九州公論社「虹」主幹の河口雅子さんにもこの場を借りて御礼を申し上げたい。単行本にまとめるにあたっては、海鳥社の杉本雅子さんにひとかたならぬお世話になった。峻厳的確なアドバイスに心より感謝している。

二〇二二年三月 室見川ほとりの寓居にて

井川 聡

本書は、二〇〇三年六月、読売新聞長崎・佐世保版の連載「山河あり」（八回）、九州公論社の月刊文芸誌「虹」二〇〇四年一月号―二〇〇九年五月号に小暮恵介の筆名で連載した「山河あり―海兵72期池田武邦の航跡」（六十六回）、同誌二〇一〇年二月号―二〇一一年十二月号「ハウステンボス創世記」、「ハウステンボス受難記」、「ハウステンボス外伝―日本の風景を守る戦い」、「ハウステンボス黙示録」（計二十二回）をもとに、大幅に加筆・修正し、編集したものである。

井川聡（いかわ・さとし）
1959年生まれ。1983年、読売新聞西部本社入社。
佐世保支局長、那覇支局長、広報宣伝部長、役員室長を経て社会部長。著書に『軍艦「矢矧」海戦記 — 建築家・池田武邦の太平洋戦争』（光人社、2010年）。共著に『人ありて — 頭山満と玄洋社』（海鳥社、2003年）。



ちょうこうそう かやぶ
超高層から茅葺きへ
ハウステンボスに見る み いけ たけくに さほう 池田武邦の作法

■
2012年4月10日 第1刷発行

■
著 者 井川聡

発行者 西 俊明

発行所 有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132 FAX092(771)2546

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-842-5

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価は表紙カバーに表示]